

イースターのお話

日本人にはまだあまりなじみのない「イースター」ですが、欧米をはじめ、キリスト教が信仰されている諸国では、春の訪れを告げる最大のお祭りです。イースターとは…？ イースターの由来と、その楽しみ方をひとといてみましょう…

イースターとは、キリスト教においてはクリスマスと並ぶ、最も重要な祭事。

十字架に架けられたイエス・キリストが、死後3日目に復活したことを記念して祝います。

イースターの祝日は、毎年日付が変わる移動祝日で、「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」と定められています。したがって、早いときには3月22日、遅ければ4月25日、この間の約1か月の中で毎年イースターの祝日が決まります(ローマカトリック、プロテスタント、イギリス国教会の場合)。

イースターの祝日の日曜日の前後では、まず、イースター前の金曜日が Good Friday(聖金曜日)と呼ばれ、この日がイエス・キリストが十字架にかかった日にあたり、この日から学校がお休みになる国があります。また、イースターの翌日の月曜日が Easter Monday として祝日になっている国も多く、イースターの前後は、クリスマス同様にイースター休暇をとる人も多い時期です。(注: 休日の設定は国によって異なります)

イースターの語源は、春の女神「エオストレ(Eostre)」に由来するという説が一般的のようですが、厳しく寒い冬から、草木が芽吹き、花が咲き、動物たちの繁殖の季節、春の訪れを祝うお祭りが、いつしかイエス・キリストの復活のイメージと重なり、統合されていったとされています。したがって、イースターは、イエス・キリストの復活を祝し、また、春の訪れも喜びあう、大変明るく、希望に満ちた祭事と言えるでしょう。

さて、クリスマスと言えば、クリスマスツリーやサンタクロースがすぐに思い浮かびますが、イースターのシンボルとして挙げられるのは、「イースター・バニー」と「イースター・エッグ」。

イースター・エッグとは、カラフルなペイントで彩色したゆで卵、または、チョコレートで作られた飾りの卵のことです。中世の世界では、イースターの9週間前は、鳥の卵を食べることが禁じられており、イースターの到来とともに、野山に出て卵を探し、卵の食事をしたそうです。

この風習がイースター・エッグの始まりとされていますが、伝統的に卵は生命の誕生や復活の象徴であり、これがイエス・キリストの復活に結びつけられ、また、冬の終わりや春の新しい命の芽吹きの喜びも表しています。

そのイースター・エッグを運んでくるとされているのが「イースター・バニー」。

イースター・エッグ同様に、チョコレートでかたどられたウサギもイースターには欠かせません。

英語圏やドイツではイースター・エッグは、イースター・バニーが運んでくる(または産む)ものとされていますが、フランスやイタリアでは教会の鐘が運んでくるとされています。ウサギは多産なので、生命や繁栄の象徴であり、また、その飛び跳ねる様子が、春の新しい生命の躍動感に通じるものがあります。

さて、イースターの日には、子供のいる家庭では、庭や家の中で卵を隠し、子供に探させる「エッグ・ハント」や、丘の上から卵を転がす「エッグ・ロール」、卵をスプーンに乗せて競争するレース「エッグ・レース」など、イースター・エッグを使った楽しいイベントが盛んに行われます。アメリカでは、毎年イースターの日には、ホワイトハウスに3万人もの家族連れが招待され、大統領一家とエッグ・ハントやエッグ・ロールを楽しむそうです。

また、卵の食事を食べたり、家族や友人とチョコレートのイースター・エッグを贈り合います。

日本ではバレンタインがチョコレートの需要のピークとなりますが、欧米ではこの時期に、イースター・エッグ、イースター・バニーをかたどったチョコレートが街のお菓子屋さんのショーウィンドウをはじめ街中にあふれ、華やかにお祝い気分を盛り上げます。

